

有賀千代吉関係資料 1958年の北海道旅行アルバムと内川千治宛書簡

Materials Related to ARIGA Chiyokichi:

A 1958 Hokkaido Travel Album and Letters Addressed to UCHIKAWA Chiharu

立石信一 (TATEISHI Shinichi)

国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 教育普及室 室長補佐 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

麻田恭一 (ASADA Kyoichi)

立教学院 評議員 (Councilor, Rikkyo Educational Corporation)

田村将人 (TAMURA Masato)

文化庁アイヌ文化振興調査官 (Senior Specialist for Ainu Culture Promotion, Agency for Cultural Affairs)

キーワード：有賀千代吉、バチラー八重子、向井山雄、ジョン・バチラー、内川千治、麻田加寿歩、聖公会、立教小学校

Keywords: ARIGA Chiyokichi, BATCHELOR Yaeko, MUKAI Yamao, BATCHELOR John, UCHIKAWA Chiharu, ASADA Kazuho, Anglican Church, Rikkyo Primary School

1. はじめに

本稿では、1957年から1958年にかけて、バチラー八重子（以下、八重子）や米沢錦一を介してアイヌ資料の収集にあたった、有賀千代吉（以下、千代吉）の関係資料を紹介する。千代吉は戦後まもなく立教小学校の創設に関わり、1959年4月には同校校長となった。千代吉によるアイヌ資料の収集には、聖公会と、千代吉の故郷である長野の人脈が深く関わっていた¹。

本稿で紹介する「1958年の北海道旅行アルバム」（以下、アルバム）は、千代吉がアイヌ資料を収集している時期のものであり、千代吉が妻の信江とともに北海道を旅したときの思い出を自ら撮影した写真や各所で得たパンフレット類などとともに綴ったアルバムである。有賀夫妻が北海道を旅したのは、1958年8月12日に東京を発ってから8月18日に戻るまでである。この間に、有珠（現、北海道伊達市）で千代吉は八重子や八重子の実弟である向井山雄（以下、山雄）に会っている。その時のことは、1958年から1959年にかけて日本聖徒アンデレ同胞会の機関誌『VISION』の29号～33号の各号に計5回に分けて詳細に記されている。

北海道での旅は、まず函館で信江の父母である鈴木善四郎（司祭）、鈴木喜己子の墓参りをして（図 007-

13、他）、1泊している。翌日には有珠を訪れ、有珠駅では、山雄の妻に出迎えられる。そこへ八重子もやって来て会う。これが千代吉と八重子の初めての対面であった。そのままタクシーで山雄のところへ向かい「丁度渋谷の笹塚に嫁いでいられるという娘さん」（有賀 1958a：4）にも会っている。

その後、有賀夫妻と八重子は洞爺湖畔にある万世閣という宿に向かい、3人で1泊している。翌日は、八重子とともに八重子の実父母の墓参をし、その後、有賀夫妻は万世閣でさらに1泊する。16日は鉄道で長万部から札幌に向かい、札幌では旧バチラー邸のほか、桑山覚を札幌農業試験場に訪ねて、桑山隆とともにふくじゅ園を訪問し、米沢錦一夫妻と面会している。以上が大まかな北海道旅行の行程であるが、聖公会関係者と思われる人たちを尋ね歩く旅といった内容である。

もうひとつの「内川千治宛書簡」（以下、内川宛書簡）は、1971年に千代吉から友人である内川千治（以下、千治）に宛てた書簡である。興味深いのは、この書簡の内容を第三者に解説する文言が加筆されており、書簡の年代やアイヌ文化への着目という点から考えると、その相手は千治の息子である内川千裕（以下、千裕）であったと推測する。千裕は、1972年に

出版された『近代民衆の記録 5 アイヌ』（新人物往来社）の編集担当者（小川・山田 1998：620）で、後にアイヌ文化に関わる書籍を数多く出版した草風館の経営者となっている。千裕は立教大学大学院で学んで（竹内 2009：103）いるが、同書ではこの書簡で触れられている人脈や立教小学校のアイヌ資料のことは見つけられないため、千代吉から千治を介して千裕へというつながりは想像の域を出ないものの、1971年の書簡と1972年出版の同書の時間的な近さは指摘しておきたい。

書簡は、英国聖公会の宣教師ジョン・バチラー（以下、ジョン）と徳川義親のつながり、ジョンを知る上田一良、桑山覚らの氏名（翻刻では個人宅の住所に関して番地等は伏字とした）が挙げられ、1958年に八重子を訪ねて北海道を旅行したこと、その時のことを聖徒アンデレ同胞会の機関誌『VISION』に連載したこと、八重子からアイヌ資料を入手して立教小学校に収め、立教大学の教員から賞讃されたことなどが書き連ねられている。一貫してアイヌ文化に関する情報源を紹介する内容となっていることから、千治から千代吉にその旨の依頼があったことへの返答と考えられる。なお、書簡中で八重子宅にあったとされるジョンの蔵書や油絵は現在北海道伊達市教育委員会² 他が所蔵している。以下では、アイヌ史という視点からアルバムおよび内川宛書簡の意義を指摘したい。

一点目は、アイヌ民具などの資料が公的機関等に収蔵される過程の一端を明らかにできる点である。とくに、有賀夫妻が八重子を訪ねて有珠を訪問したときに撮られた写真の数々は、八重子の普段の姿を映し出すとともに、資料の授受に関係した双方の間柄が親密であったことを明らかにしている。

二点目は、晩年の八重子の足跡をたどるうえでの人間関係や、聖公会との関わりを知ることができる点である。このことは、八重子の生涯を通して、キリスト教への信仰が近代のアイヌ民族にとっていかなるものであったのかの一端を明らかにする上でも重要であると考えられる。

三点目は、アルバムと関わりの深い時期を含む戦後から1960年代後半にかけてのアイヌ民族の活動の一端を明らかにできる点である。この時期は記録として残されていることが少なく（東村 2006：12）、また、北海道アイヌ協会も戦後早々に創立されはするものの、すぐに「休会状態」となった。したがって、千代吉と八重子の関係を通して、この時期にアイヌ民族

がいかなる活動をしていたか明らかにできる意義は大きい。

そして最後は、八重子と千代吉によって聖公会や立教学院を起点に作られた関係性が、八重子没後もつながりを保ち続け、アイヌ文化を伝え、広めることなどに関係していたかもしれない点である。このことは、アイヌ伝道を積極的に行った聖公会の特徴として特筆に値する。八重子と山雄が伝道師や司祭として活躍したこと、ジョンや千代吉の持っていた人脈、そして戦後のアイヌ伝道における重要な役割を果たした上田一良などが関わり合いながら、アイヌ文化を伝えるために果たした役割は教育や出版など多岐に及ぶ。こうした在り方は、直接的にアイヌ伝道に関わってきたジョンなどだけではなく、多様な関係性によって成り立っていたことを明らかにする。

したがって、本稿で取り上げる資料は、戦後のアイヌ民族の活動を明らかにしながら、同時に、アイヌ民族自身やアイヌ文化に関わる研究者ではない者によって、どのようにアイヌ文化が伝えられてきたのかを明らかにする。

2. 当該資料と関係する人物について

有賀千代吉（1895-1987）³

有賀千代吉は、1895（明治28）年に長野県上伊那郡辰野町に生まれた。渡米を希望していた千代吉は、旧制大町中学校（現、長野県大町岳陽高等学校）卒業後、米国聖公会が建てた立教大学に進学し、在学中にクリスチャンになり渡米を志すものの、移民制限のため渡米の道はきわめて狭かった。1920年に大学を卒業すると、南満州鉄道株式会社（以下、満鉄）に就職するが、その翌年、故郷にあった教会（辰野聖公会）の斡旋でバンクーバーの日本語新聞社「大陸日報社」に招かれ英領カナダに渡った。千代吉はこうして「渡米」を実現した。

渡加後、千代吉は新聞記者として働きながら、教会（日本人聖公会）でもリーダー的存在となった。1925年に日本から婚約相手の鈴木信江（以下、信江）を呼び寄せて家庭を築いた。信江は立教時代の親友の義妹であり、北海道教区の鈴木善四郎司祭の三女であった。千代吉は教会の要請に応じて1926年に大陸日報社を退職し、3年間の約束で牧師として働いた。

1930年に大陸日報社に支配人として復職する。その2年後、バンクーバー郊外のポート・ヘネー村の日

本語学校長に迎えられ、ここで「立派な日本臣民」ではなく「よきカナダ市民」⁴になることを説き続けた。

こうしたカナダでの生活は、太平洋戦争の開戦(1941年12月)によって突然終わる。千代吉は、開戦と同時にカナダ政府に39人の危険な日本人指導者として逮捕・隔離され、その後、強制収容所を転々とすることになる。1年半後に家族がいる収容所に合流した千代吉は、捕虜交換船に乗船するという幸運に恵まれるが、捕虜交換地で日本船に乗り換えてから船内の「軍国主義」に嫌気がさし(麻田 2025:317-318)、当時日本領のシンガポールで下船し、軍属として軍政部で働いた。千代吉はここで三女を赤痢で失う。

1946年4月に日本へ引揚げ、英進駐軍の通訳としてようやく安定した生活を送り始めた1948年1月に、立教学院から小学校創設の責任者となることを要請される。これは、キリスト教主義の立教学院が戦時中に軍国主義に抗しきれなかったことから、幼児教育の必要を痛感してのことだった。千代吉はこれを受諾し、建築資金集めに自らも奔走しながら「愛の教育」⁵を実践し、13年間で立教小学校の土台を築いた。

1961(昭和36)年3月に立教小学校を定年退職すると、澤田美喜の要請に応え、4月からエリザベス・サンダース・ホームの常務理事として7年間澤田を支えた。

1968(昭和43)年、老いを感じた千代吉は自宅を立教学院に寄贈し、娘たちの住むアメリカに永住するため日本を離れた。1987年7月ロサンゼルスで逝去、9月に立教小学校講堂で初の小学校葬が執り行われた。

バチラー八重子と向井山雄

バチラー八重子(1884-1962 以下、八重子)は、現在の北海道伊達市有珠で、父向井富蔵(モコッチャロ)と、母フユ(フツセ)の間に生まれた。実弟には向井山雄(1890-1961 以下、山雄)がいる。8歳の時に英国聖公会の宣教師ジョン・バチラー(以下、ジョン)から洗礼を受ける。16歳のときに札幌でジョンが運営していたアイヌガールズホームに入っている。1902年には東京の聖ヒルダ神学校(現香蘭女学校)で学び、1912年には聖公会の女性伝道師に登録されている。

23歳のときにバチラー夫妻の養女となり、布教活動を助けた。そして、1909年にはバチラー夫妻とともに、シベリア鉄道経由でイギリスに渡る。イギリス

からの帰国の途上で、オーストラリアとニュージーランドへの訪問も計画するも、最終的に何らかの理由で、途中で断念しているが、こうした体験の持ち主は、当時としては希有だったといえる。

八重子は、1931年に金田一京助や佐佐木信綱の支援もあり、短歌の歌集『若きウタリに』(バチラー1931)を出版した。母語であるアイヌ語を交え、当時のアイヌ民族の境遇を主として、両親や故郷、イギリス訪問、そして口承文芸の英雄への思慕を題材として、様々な思いを短歌に託して詠んでいる。その他、八重子の著作は『ウタリグス』や『ウタリ之友』各号など多岐にわたる。

バチラー夫妻とともに長らく札幌で暮らしていたが、義母ルイザとの死別や義父ジョンの帰国を機に1940年頃有珠に戻り、弟の山雄とともにバチラー夫妻記念堂(有珠聖公会)で伝道師として活動する。晩年は経済的に苦しい生活を送るが、信仰の道に尽くした。1959年には聖公会百年記念大会が東京で開催されることを機に上京し、このとき千代吉宅にも宿泊したと考えられる。そして、BSA(日本聖徒アンデレ同胞会)から送られた資金をもとに、聖公会の信徒だったウタリ(仲間、同胞)を尋ねる旅をし、そのことをまとめた文章には「嬉しさに涙し笑い合ひ、そして感謝の祈りを共にした友の顔々」(バチラー1960:3)⁶と綴られている。1962年に京都に知人を訪ね、そこで亡くなる。

弟の向井山雄は、1912年に立教中学校を卒業し、1914年には大阪三一神学校に入学している。そして、1918年には聖公会神学院を卒業する。その後、牧師として活動し、1926年にはアイヌ民族として初めて聖公会の司祭になるなど、聖公会や立教と縁の深い人物である。

1930年に伊達町の町会議員になり、以降、1942年まで4期にわたって議員を務めている。そして、戦後創立された社団法人北海道アイヌ協会の初代理事長を務めるなど、生涯にわたって精力的に活躍した。また、雄弁家として知られるとともに、『ウタリグス』をはじめとし、その後も著述活動を続けているが、その内容は差別に対する批判など激烈なものが多い。晩年は病床に伏すことが増え、千代吉が有珠を訪れた1958年には牧師を退職している。そして、1961年に死去する。

筆者らは別稿において、千代吉と山雄が有珠で出会う前から何らかの接点を持っていたのではないかと

指摘をしたが、この点についてはまだ推測の域を脱していない。しかし、内川宛書簡からわかることとして、1971年になっても千代吉が山雄一家のその後の様子を把握していたことは指摘しておきたい。

そしてもう一点は、千代吉が上田一良のことを「僕の友人」と書き記していることである。立教大学時代に、上田は千代吉の2学年下であり、互いにクリスチャンだったことから、この当時から面識があったと考えられる。さらに、上田は山雄との関係も深かったと考えられる。掛川は「神学院時代に同級だった上田一良主教（故人）」が語ったこととして、「向井君とは寮も同室だったが、向井君が寝言で聖書を誦んじていたのには驚いたものだった」（掛川 1998：194）と記している。上田と山雄の年齢差を考えると神学院で同級だったことは考えにくいので、立教中学時代のエピソードということも考えられる。また、1947年には伝道局長として有珠で山雄とともに集会に参加し、そこで2人とも講話を行っている（ライト前川 2003：385）ので、遅くともこの頃には面識があったことは確実である。なお、上田は1949年から北海道教区の主教を務めている。したがって、上田は千代吉と友人であったばかりか、山雄とも旧知の仲であり、先輩後輩の間柄だった。

内川千治と麻田加寿歩

千代吉には多くの友人がいたが、中でも大町中学の寄宿舎「蛍雪舎」（小島 1990：44-45）での結びつきは強かった。

1901（明治34）年に長野県で5校目として創立された大町中学校には三つの寮があったが、その中で千代吉は学校管理の寄宿舎ではなく、生徒たちが自治で運営する自炊寮蛍雪舎を選び、ここで5年間を過ごした。

千代吉より2学年下で、中学卒業の年に洗礼（メソジスト）を受けた内川千治（1899-1995）は、「有賀兄は〔中略〕立教在学中、われわれ蛍雪舎に学んでいる後輩に対して熱心にキリスト教的な影響を与えてくれたものようだ。それは後日になって想像されるのであった。その後、私は関西学院や同志社に入学してキリスト教神学を専攻するようになったが、その素因ともいえるものは有賀兄の存在とその影響ではなかったかと思っている。」（内川 1984：53-54）と書いている。

内川はダニエル・ノルマン博士、賀川豊彦、河上丈

太郎等に師事し、戦前はいくつかの教会の牧師を歴任し、戦後は松商学園高校教頭を務めた後、農民出資による新設の協同乳業株式会社に入社し、広報誌『ニューデーリイマン』の編集長を務めた。その後、中央酪農会議に勤務してからは通信教育用の雑誌『中央酪農情報』の編集を担当した。

内川は、クリスチャンであるだけでなく、教育者としての考え方や、文学や歴史に対する興味の持ち方について、千代吉とは最後まで最も理解し合える友であり続けた。千代吉が1967年の秋にアメリカ永住を思い立ち、後顧の憂いなく実行に移せたのは内川の存在が大きかった。相談を受けた内川は、喜んでエリザベス・サンダース・ホームでの授業と副校長の職を一年余り引き受けた。また、千代吉の渡米後も頻繁に手紙のやりとりをしていた内川は、千代吉からの百数十通にも及ぶ手紙から老境を綴った詩を抜き出し『終焉—イースターへの道—有賀千代吉詩集』を編んで千代吉を驚かせた。

『終焉』だけでなく、1973年に『峠のあかり』（有賀千代吉著）の出版を引き受けたのが、やはり蛍雪舎の後輩麻田加寿歩（1900-1990）であった。麻田は千代吉や内川とは、まったく違うタイプの熱血漢で、5年生で中学を退学すると、東京で開校したばかりの植民貿易語学校に入学、卒業後は満鉄に就職した。後に同じく蛍雪舎の先輩で、満洲で実業家として成功した鳥羽実に見込まれてハルビンの鳥羽会社の経営を任されたが、終戦後はシベリアに抑留され、麻田が日本に帰還したのは1950年のことだった。帰国後は娘婿が創業したばかりの恵雅堂出版で長く社長を務め、千代吉が日本を去る際に自宅を託されている。

3人は不思議にウマが合い、終生その友情は変わらなかった。1979年、麻田は2人の思いに応じて受洗した。

3. 有賀千代吉関係資料について

千代吉の関係資料は複数の個人や機関に分かれて所蔵されているため、その概要を記しながら、本稿で扱う資料についても触れる。

千代吉に関する資料は、大きく分けて3つの所蔵先に区分できるが、千代吉は1948年から1961年にかけて立教小学校の創設期から尽力し、退職前には校長を務めたことから、有賀千代吉関連資料は、もともと立教小学校が所蔵していた資料が大部分を占める。

しかし、本原稿執筆時点の2025年10月現在、立教小学校は新校舎建設のため仮校舎に移転中であり、それに伴って資料の大部分は2024年3月に立教小学校から国立アイヌ民族博物館に寄託されるとともに、立教学院史資料センターなどにも寄託されている。したがって、資料の保管場所については暫定的であることを予め記しておく。

一件目は、国立アイヌ民族博物館である。同館には、立教小学校から寄託を受けた資料が管理されている。主に立教小学校で保管されていた63点のアイヌ民具資料と、千代吉の書簡綴りである。書簡は1000点以上に及び、執筆時点では整理中であるが、ほとんどが千代吉に宛てられた書簡を綴ったもので、送り主は、立教小学校の関係者と思われる人たち、千代吉の故郷である長野の人たち、カナダの人たち、立教小学校の児童など多岐にわたる。そのなかに、バチラー八重子からの書簡や、八重子とともにアイヌ民具資料を立教小学校に送ったと考えられる米沢錦一の書簡などが含まれている。

二件目は、立教学院史資料センターである。同センターには、前述の理由で立教小学校から寄託を受けた資料と、それ以前に小学校から受け入れた資料がある。当初からの資料には、主に千代吉のカナダ時代の資料と、戦後に千代吉が巣鴨拘置所に収容されていた戦犯たちの慰問を続け、やり取りした書簡⁷である。また、内川宛書簡で千代吉が言及しているように、戦犯たちとの書簡は千代吉自身が大学に預け、それが現在では同センターに所蔵されたと考えられる。寄託資料は、立教小学校で千代吉が教鞭を執っていたときの「主事日記」や「校長日記」、そして、書簡綴りである。なお、書簡綴りには、八重子からの書簡も含まれている。

三件目は、本稿の筆者でもある、麻田恭一所蔵資料である。麻田家で所蔵している資料には、二つの系統の資料がある。一つは千代吉が離日するに際して、自身の上石神井の邸宅を麻田家に託したために、そこに残されていた書簡集が麻田家管理になったものである。もう一つは千代吉と無二の親友であった千治が、千代吉から送られた書簡を整理し、それを麻田家に託したものである。立教学院史資料センターや国立アイヌ民族博物館に寄託された書簡集は、そのほとんどが、千代吉が受け取った書簡の綴りであるが、麻田家所蔵の書簡集は、千代吉が内川に宛てて出した書簡の綴りである。本稿で取り上げる資料2点は、いずれも麻田家

所蔵の資料である。

なお、千代吉はレジストラートでもいべき丁寧さで受け取った書簡をファイリングするとともに、関係する資料も残している。さらに、千代吉は新聞記者だったこともあり、自身でカメラをもち、撮影した多くの写真もファイリングしたと考えられる。有賀千代吉関係資料の全容解明は、八重子との関係を中心にアイヌ民族の歴史にとって重要であることは言うに及ばず、戦前期バンクーバーの日系人社会の様相と、交換船によって帰国した日系人の歴史はもとより、立教小学校の校史にとっても重要な資料群であると言える。

翻刻について、判読できなかった文字は■、プライバシー情報として伏せ字としたものは◆とし、また、内川宛書簡で千代吉とは別の筆跡と思われる書き込みは網掛けとしている。なお、旧字体、罫字等は現在使われている漢字、ひらがなに統一した。アルバムのページ番号は3桁の数字で表し、枝番号は資料の通し番号である。中扉にはページ番号をふっていない。また、資料番号はページ左上より左下、中上、中下、右上、右下の順番にふっている。

なお、この資料紹介は、国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト2024B06及び2025B03の成果の一部である。

4. 資料紹介

「1958年の北海道旅行アルバム」

行程：1958年8月12日-18日

8月12日 上野→青森

8月13、14日 青森→函館（函館1泊・若松）

8月14、15、16日 函館→長万部（洞爺湖2泊・万世閣）

8月16、17、18日 長万部→札幌（札幌2泊・グランドホテル）

8月18日 札幌→東京（日本航空）



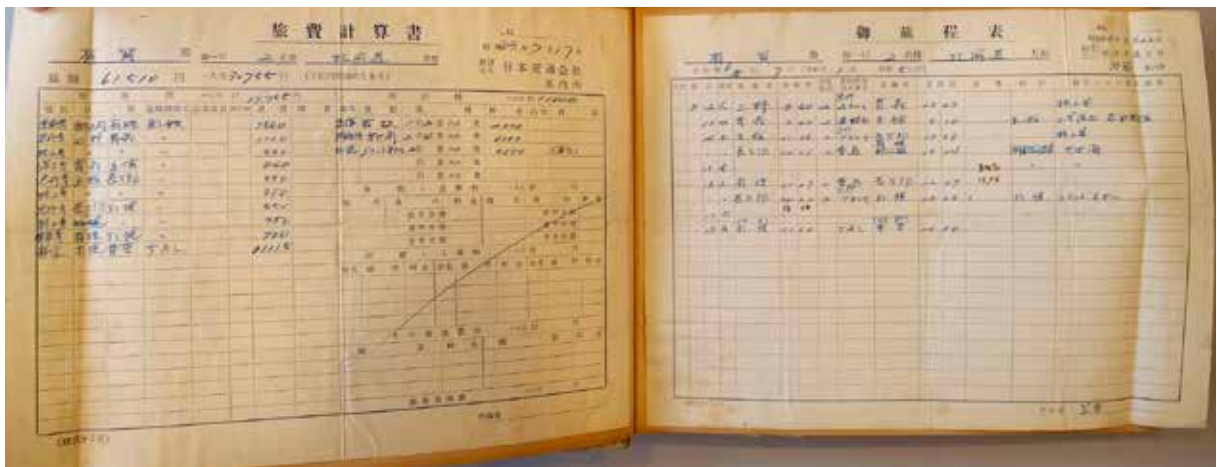
図：001-1

001-1 「北海道みやげ 北海道物産協会」土産物包み紙か

包み紙に手書きで「昭和33-8-12 — 18」

包み紙のページに「日航の事務所のある産業会館で。」

包み紙ウラに「カサイ魚■■■ Boy マネー クスリ」



図左：002-2 右：003-3

002-2 「有賀殿 旅費計算書 財団法人日本交通公社 案内所 昭和33年7月17日」

003-3 「有賀殿 御旅程表 財団法人日本交通公社池袋案内所 昭和33年7月22日 作成者 笠原」



図左：004-4 図右：005-5、005-6、005-7、005-8、005-9

004-4 〔北海道の路線図〕

005-5 「33-8.13 汽船寝台券 A 下段 第 114 号 羊蹄丸」

005-6 「33-8.13 汽船寝台券 A 上段 第 115 号 羊蹄丸」

手書きで「乗船は八月十二日夜十一時四十三分 函館着 八月十四日 午前五時十分」

005-7 写真〔鏡台の前の信江 A〕

005-8 〔明細書 若松旅館〕

手書きで「びくびくしながら貰った勘定書」

005-9 写真〔鏡台の前の信江 B〕

手書きで「若松旅館の一室にて 三三.八.一四」



図左：006-10 ※写真貼付痕 3ヶ所 右：007-11、007-12、007-13、007-14 ※写真貼付痕 1ヶ所 剥離写真：007-15、007-16、007-17

006-10 写真〔橋の上の信江 A〕

手書きで「湯の川の日」「若松旅館の前庭」「海岸近くの橋上」「この橋のたもとにアイヌ青年の店があつて、小熊が店先につないであつた」

007-11 写真 ※007-11 と 007-12 が表面で付着しているため内容確認不可

007-12 写真

007-13 写真 〔「鈴木善四郎 鈴木喜己子之墓」石碑の前に立つ信江 A〕

007-14 写真 〔「鈴木善四郎 鈴木喜己子之墓」

石碑裏「父 大正七年十一月廿六日 母大正十年三月三十日 永眠 鈴木順子建」

手書きで「函館郊外の墓地にて 33.8.13」

- 007-15 写真 (アルバムから剥離) [「若松旅館の前庭」に立つ信江か]
- 007-16 写真 (アルバムから剥離) [「鈴木善四郎 鈴木喜己子之墓」石碑の前に立つ信江 B]
- 007-17 写真 (アルバムから剥離) [橋の上の信江 B]



図左 008-18、008-19、008-20、008-21 ※写真貼付痕 2ヶ所 図右 009-22、009-23、009-24、009-25、009-26 ※貼付痕 2ヶ所
剥離写真 009-27、009-28、009-29、009-30

手書きで「聖ヨハネ教会」

- 008-18 写真 [「日本聖公会 函館聖ヨハネ教会」の門柱の前に立つ信江]
手書きで「啄木の墓」
- 008-19 写真 [「啄木一族墓」の前に立つ信江]
- 008-20 写真 [啄木の墓と函館山 ■_A]
- 008-21 写真 [信江と岩か]
手書きで「岩の上では新東宝のロケが始っている」
- 009-22 写真 [函館湾か]
手書きで「函館の遠望」
- 009-23 写真 [列車の前に立つ信江と和装の女性 _A]
手書きで「小田島さんと函館駅で」
- 009-24 写真 ※ 009-24 と 009-25 が表面で付着しているため内容確認不可
- 009-25
手書きで「さよなら函館 33.8.14」
- 009-26 写真 [列車の前に立つ信江と和装の女性 _B]
- 009-27 写真 (アルバムから剥離 [啄木の墓と函館山 _B])
- 009-28 写真 剥離した写真 [女性 7 名が集まっている写真]
- 009-29 [旅館若松の荷札]
- 009-30 [旅館若松のパンフレット]



図左 010-31、010-32、010-33、010-34、010-35、010-36 図右 011-37、011-38、011-39、011-40、011-41、011-42

- 010-31 写真〔八重子、信江、山雄、山雄妻〕
手書きで「有珠」「向井牧師夫妻と八重子姉」 ※『VISION』に掲載された写真。
- 010-32 写真〔洞爺湖の中の島が見える部屋の八重子と信江〕
手書きで「えぞ富士の見える窓」
- 010-33 写真〔洞爺湖と羊蹄山が見える部屋で座る信江_A〕
- 010-34 写真〔洞爺湖が見える部屋の八重子と信江〕
- 010-35 写真〔客室のベランダの信江と八重子_A〕
- 010-36 写真〔客室のベランダの信江と八重子_B〕⁸
手書きで「洞爺湖畔万世閣 33.8.14-16」
- 011-37 写真〔バチラー夫妻記念堂遠景〕
- 011-38 写真〔バチラー夫妻記念堂内観_A〕
- 011-39 写真〔「バチラー夫妻記念堂」の看板〕
手書きで「カムイタプコの丘にたつ会堂」
- 011-40 写真〔家の前に立つ八重子と信江〕
手書きで「向井八重子姉の家(チャシ)」
- 011-41 写真〔バチラー夫妻記念堂の前に立つ八重子と信江〕
- 011-42 写真〔バチラー夫妻記念堂内観_B〕
手書きで「聖堂内部」
ページ中央に手書きで「バチラー夫妻記念 有珠」



図左 012-43、012-44、012-45 図右 013-46、013-47、013-48、013-49

- 012-43 写真〔墓碑の前に立つ八重子〕
手書きで「八重子姉の母の墓 昭和六年一月十五日逝去」
- 012-44 「明細書・領収証 有賀様 昭和33年8月16日 万世閣」
- 012-45 写真〔向井富蔵の墓碑の前に立つ八重子〕
手書きで「八重子姉父の墓 明治二十九年二月二十四日逝去」
- 013-46 万世閣の荷札
- 013-47 万世閣の荷札「浦島の間 有賀様」
手書きで「洞爺さよなら」
- 013-48 写真〔洞爺湖と羊蹄山が見える部屋で座る信江_B〕
手書きで「貴賓室が二泊の部室〔ママ〕であった」
- 013-49 写真〔ホームに立つ信江〕
手書きで「札幌への途、長万部駅」



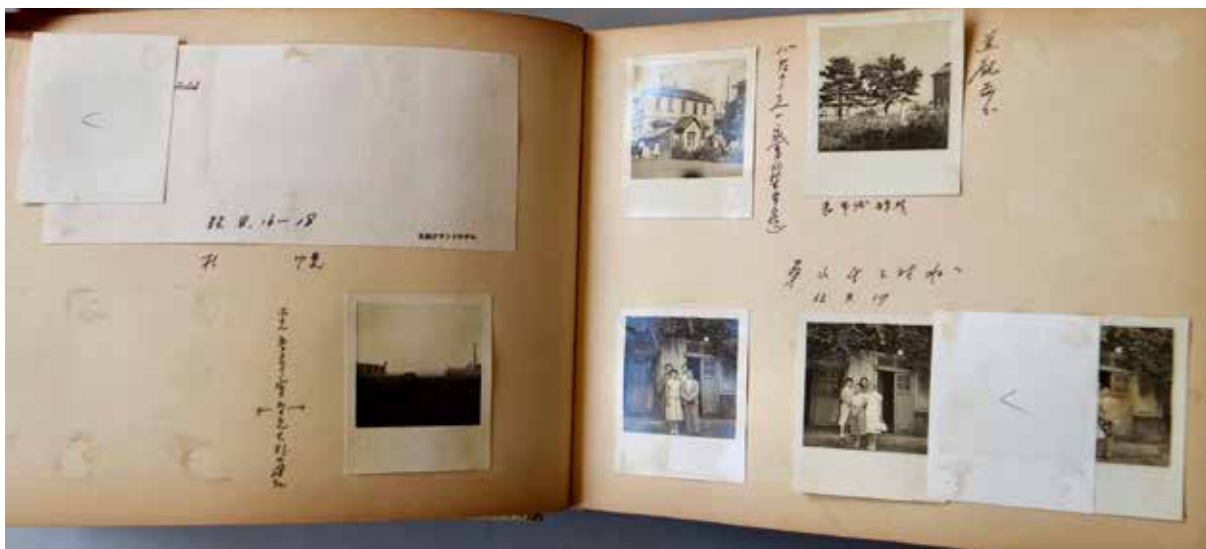
図左 014-50 図右 015-51



014-50 万世閣のパンフレット

パンフレットのなかに手書きで「↑私の部屋」

014-51 アルバムに貼付されているため表紙未確認 万世閣のパンフレットか



図左 016-52、016-53、016-54 ※写真貼付痕1ヶ所 図右 017-55、017-56、017-57、017-58、017-59、017-60 ※写真貼付痕1ヶ所

016-52 写真 ※016-52と016-53が付着しているため写真の内容確認不可

016-53 「札幌グランドホテル」と書かれた紙

紙に手書きで「33.8.16-18」

ページ中央に手書きで「札幌」

016-54 写真〔外の建物の風景〕

手書きで「←ホテル五〇三号室から見た外の建物→」

017-55 写真

手書きで「バチューラーさんの家（今は福祉事業会かん）」

017-56 写真〔女性3人、男性1人の集合写真〕

017-57 写真〔建物と畑の中に立つ信江〕

手書きで「道庁前で」「農事試験場」

017-58 写真〔017-56の女性3人と信江の集合写真〕

017-59 写真※017-60と付着しているため写真の内容確認不可

017-60 写真※017-60と付着しているため写真の全体の確認不可。

ただし、017-58の信江が持っているバッグと017-56の男性が確認できる
ページ中央に手書きで「桑山氏を訪ねて 33.8.17」⁹



図左 018-61、018-62 図右 019-63

- 018-61 〔証書 空の茶屋札幌グランドホテル 33.8.17〕
手書きで「何んとしても高価な「御飯」である。」
- 018-62 〔証書 札幌グランドホテル 33.8.18〕
- 019-63 〔証書 札幌グランドホテル 33.8.17〕



図左 020-64 図右 021-65、021-66、021-67、021-68

- 020-64 「航空のしおり」(日本通運株式会社 日通札幌航空)
- 021-65 日本航空の荷札
手書きで「荷札」
- 021-66 写真 〔飛行機〕
- 021-67 日本航空の荷札
- 021-68 写真 〔飛行機〕
手書きで「雨がふっていた。私のチェアーは此の入口の近くであった。」
ページ中央に手書きで「33.8.18 11.10 AM 千歳飛行場にて」

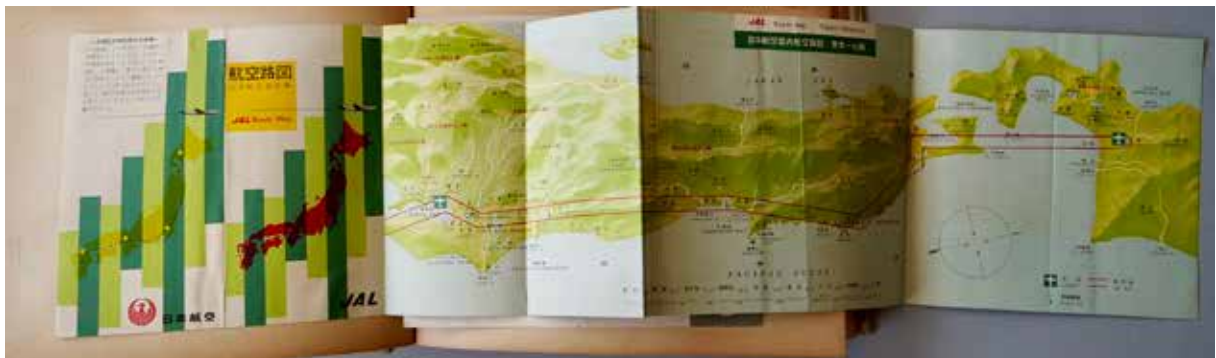


図左 022-69 図右 023-70

022-69 「万年筆入れ袋」

手書きで「出発してからは寒くてがたがたした。毛布が皆にわたったので やっと寒さをこらえる事が出来た。此の袋の〔ママ〕万年筆をいれた。」

023-70 「日本航空国内航空路図 東京—大阪—福岡」「日本航空国内航空路図 東京—札幌」



図左 024-71 図右 025-72

024-71 「日本航空国内航空路図」 023-70 と同一

025-72 「御搭乗記念絵葉書 日本航空」 ケース



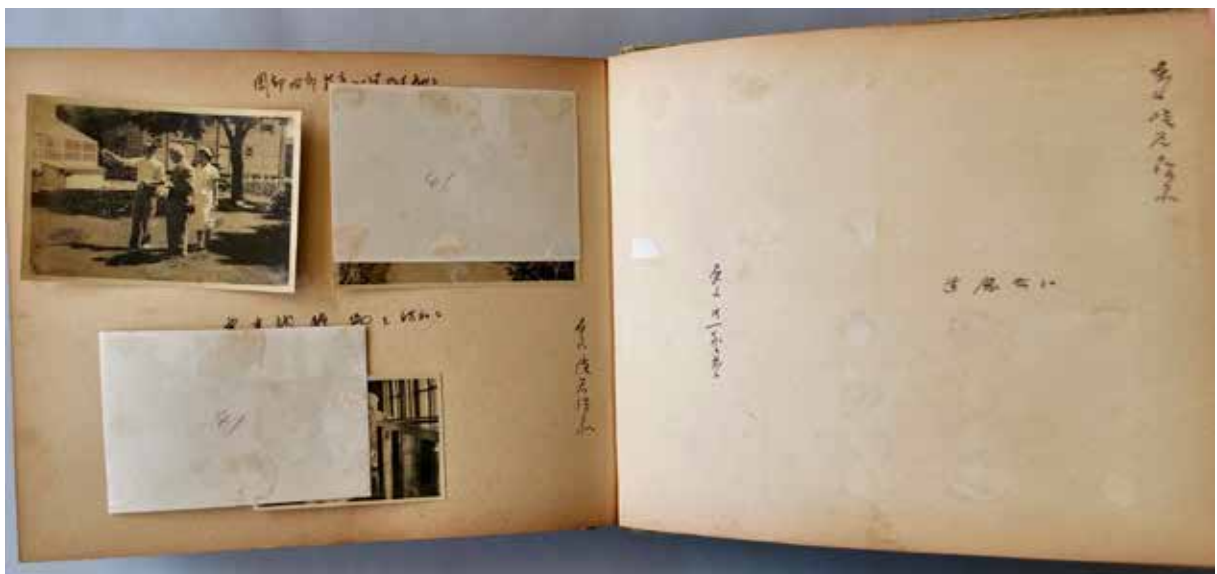
図左 026-73、026-74 図右 027-75

- 026-73 絵はがき「ホノルル国際空港の…」
- 026-74 絵はがき「DC-7C SUPER COURIER」
- 027-75 エチケット袋



図左 028-76 図右 029-77、029-78、029-79

- 手書きで「羽田着 三三、八、一八日午後二時半」
 - 028-76 写真〔上空から見た町並み〕
手書きで「機上から見た東京」
 - 029-77 写真〔「ヨルダン農園」「jordan farm」と書かれた看板の前に立つ男性2人〕
手書きで「ヨルダン農場」
 - 029-78 写真〔「FUKUJUEN」と書かれた看板の前での写真。中央に信江と千代吉〕
手書きで「昭和三十三年八月十七日午後 桑山隆君夫妻と共にふくじゅ園を訪ねた」
 - 029-79 写真〔飛行機のタラップの前に立つ信江〕
- ※ 029-77 と 029-79 が付着している。



図左 030-80、030-81、030-82、030-83、030-84

- 030-80 写真〔男性、千代吉、信江〕
手書きで「岡部四郎技官から説明を受けて」

030-81 から 030-84 まで 写真付着のため確認できず
手書きで「桑山隆君作品」
ページ中央に手書きで「農事試験場を訪ねて 33.8.17」

右ページ

手書きで「桑山氏一家と共に」
手書きで「道庁前で」
手書きで「桑山隆君の作品」



図左 031-85、031-86 図右 032-87

- 031-85 写真〔女性、千代吉、信江、男性 ※千代吉、信江とともに写る米沢夫妻〕
手書きで「ふくじゅ園応接室で 三三.八.一七日」
- 031-86 写真〔千代吉と信江〕
手書きで「札幌パチェラー先生の住居にて 三三.八.一七」
手書きで「桑山隆君作品」
- 032-87 パンフレット「アイヌの伝説に有名な北海道の特産 黒百合の栽培 三越園芸部」

内川千治宛有賀千代吉書簡 1971年3月17日付

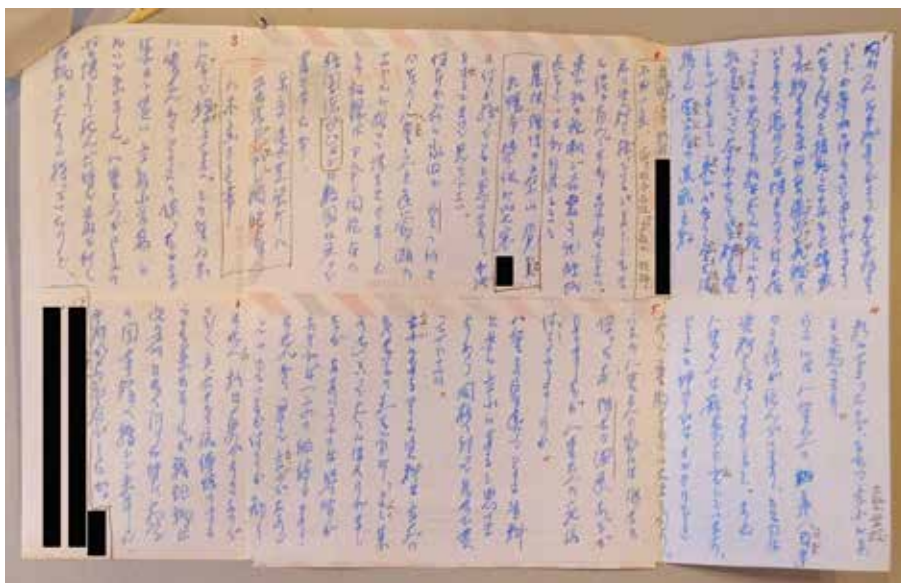


図033 内川千治宛千代吉書簡3月17日付 1

書きましたから、

東京、港区芝罘町八
聖徒アンデレ同胞会

3

八木立三主事

に会って探して下さい。その時以来
八重さんからアイヌの使ったものを
集めて貰い立教小学校に
おいて来ました。八重さんがアイヌの
習慣として死んだ時に着て行く
着物を大事に持っていたのを

4

私に下さったので、それも立小にあ
ると思います。
ウスには八重さんの知弟(司祭)
の子供が住んでいます。その方は
資料を持っています。また
八重さんは歌集を出しています。
アイヌの間ではインテリとして
大へん尊敬されていたようです。

5

ウスの八重さんの家には博士の
使った本、博士の油画などが
ありましたが八重さんの死後
何うになりましたか。
八重との写真もアイヌ資料
と共に立小にあると思いま
すから同校へ行って見せて貰
って下さい。
立小にあるアイヌ資料は立大の
考古学の先生方から「よく集
めた」といって大へんほめられまし
たが ああいうものは興味が
なければ一文の価値もあり
ませんから果して立小で大事に
してくれているか何うか知り

6

ません。私は歴史がすきなので

バチラーさんのことわかりましたか
比屋根安定編
「新キリスト教事典」(299頁)
に、かなり詳しく出ています
八重さんのことはありませんが前に
書いたようにビジョン誌を
見れば大体わかると思いま
す。そして立小のアイヌ資料
は是非見て下さい。徳川さん
にも会って見る事は大切です
私は孫を教えたので親しく
していますから。
〔下略〕

参考文献

- 麻田恭一
2024『戦争が生んだ小学校—有賀千代吉の「愛の教育」—』惠雅堂出版株式会社。
- 有賀千代吉
1958a「バチラー八重子さん(一)」『VISION』(第29号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、4頁。
1958b「バチラー八重子さん(二)」『VISION』(第30号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、4頁。
1958c「バチラー八重子さん(三)」『VISION』(第31号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、4頁。
1959a「バチラー八重子さん(4)」『VISION』(第32号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、4頁。
1959b「バチラー八重子さん(最終回)」『VISION』(第33号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、4頁。
- 内川千治編
1984『終焉—イースターへの道—有賀千代吉詩集』惠雅堂出版株式会社、53-54頁。
- 太田久元、横島公司
2021『「有賀千代吉関係資料」をめぐる基礎的考察(1):「戦犯」たちとの書簡を中心に』『立教学委員史研究』(巻18)、50-86頁。
- 小川正人、山田伸一編
1998『アイヌ民族—近代の記録』草風館。
- 掛川源一郎
1988『バチラー八重子の生涯』北海道出版企画センター。
- 黒田格男、大島直行、古原敏弘、小川正人編
2006『伊達市噴火湾文化研究所蔵のジョン・バチラー関係資料1:資料紹介』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12号。
2007『伊達市噴火湾文化研究所蔵のジョン・バチラー関係資料2:資料紹介』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13号。
- 小島正美
1990『大町高校ものがたり』郷土出版社。
- 竹内渉
2009『北の風—南の風—部落、アイヌ、沖縄。そして反差別』解放出版社。
- 立石信一、田村将人、麻田恭一
2024『立教小学校蔵のアイヌ資料コレクションの成立について—有賀千代吉とバチラー八重子の関係を中心に—』『物質文化』(104):55-71。
- 中島敏夫
1982『桑山覚先生の逝去を悼む』『昆蟲』50(2)、東京昆蟲學會。
- バチラー向井八重子
1960『ウタリ伝道訪問の記(一)』『VISION』(第45号)社団法人日本

- 聖徒アンデレ同教会、3頁。
1960『ウタリ伝道訪問の記(二)』『VISION』(第46号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、3頁。
- 東村岳史
2006『戦後期アイヌ民族—和人間関係史序説—1940年代後半から1960年代後半まで』三元社。
- ライト前川眞二郎
2003『前川眞二郎著作集—日誌(昭和十六~二十三年)——教役者の足跡を辿りて』。

注

- 1) このことについては以下を参照されたい。立石信一、田村将人、麻田恭一「立教小学校蔵のアイヌ資料コレクションの成立について—有賀千代吉とバチラー八重子の関係を中心に—」『物質文化』(104)、2024年、55-71頁。
- 2) 黒田格男、大島直行、古原敏弘、小川正人編『伊達市噴火湾文化研究所蔵のジョン・バチラー関係資料1・2:資料紹介』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12、13号、2006-2007年。
- 3) 有賀千代吉について詳しくは、以下を参照されたい。麻田恭一『戦争が生んだ小学校—有賀千代吉の「愛の教育」—』惠雅堂出版株式会社、2024年。
- 4) 『戦争が生んだ小学校』209頁を参照。また、「カナダに同化しない限り日系人の民族的発展はない」(『戦争が生んだ小学校』207頁)という確固たる同化論を打ち出していたヘネー村は、日系社会の中で絶対的少数派だった。
- 5) 「愛の教育」は、千代吉自身が直接使った言葉ではなく、立教小学校卒業生で初めて校長となった3回生の田中司(第8代/在職1997-2004)が、千代吉から受けた教育を一言で表現したもの。
- 6) 本連載の(一)に掲載されている写真は、01243 写真〔墓碑の前に立つ八重子〕と同様のものと考えられる。バチラー向井八重子「ウタリ伝道訪問の記(一)」『VISION』(第45号)社団法人日本聖徒アンデレ同教会、1960年、3頁。
- 7) 戦犯たちとの書簡は、詳しくは以下を参照されたい。太田久元、横島公司『「有賀千代吉関係資料」をめぐる基礎的考察(1):「戦犯」たちとの書簡を中心に』『立教学院史研究』(巻18)、2021年、50-86頁。
- 8) 010-36は伊達市教育委員会蔵写真120-123「バチラー八重子と女性」(黒田ほか2006、97頁)と同一のもの。したがって、千代吉が撮影し、現像した写真を八重子に送ったものが向井家に残されており、それが伊達市に寄贈されたと考えられる。
- 9) 桑山覚(1897-1981)釧路市生まれ。農事試験場に勤め、農林省が管理する北海道農業試験場長と北海道立農業試験場長を併任するなどした。内川宛書簡によると、千代吉の「親戚」。桑山覚の経歴については以下を参照した。中島敏夫「桑山覚先生の逝去を悼む」『昆蟲』50(2)、東京昆蟲學會、1982年。